

現世と死後の世界

死後の世界は現世のつづき

わが国では、肉体の死を以て「人間とは死ぬものだ」という考え方が大方の人々の常識となっている。この常識に対し、「『死』という現象は人間にはない」と断言しているのが心霊研究であり、その結論は世界の一流の学者たちによる種々の科学的実験によって得られたもので、ただ単に、まやかしの理論であるとか観念によって断定しているわけではない。

そこで、「心霊科学とはどのようなものであるか」についてよく知っておく必要がある。今回は心霊科学そのものの説明は省略するが、その樹立の端緒となったのが1848年（正確にはもっと以前から研究はなされているが）におきた北米のフォックス家事件といわれる幽霊現象（叩音現象）で、これ以後学問として研究の歩を進めることになったが、その発展は、海をこえてイギリスにわたってからであった。したがって、イギリスを中心として発達した学問と言えるのである。

心霊科学

この心霊科学の研究によって、とくに「真の人間の探求」の領域の解明につながったものとして、とくに注目される二つの研究テーマがある。

その一つは、人間は、死後もその人の個性は存続する、ということ。

もう一つは、死後の世界、すなわち地上生活を終えた人々が生活している世界とこの地上（「現世」「物質生活」とも表現される）との間には、交通が開かれている（幽明交通可能）ということである

この二つは、現代人にとって、いわば唯物的（物質万能主義とも言える）人生観をもっぱら信奉している人々には革命的、革新的ショックと言われるような、大きな驚きをあたることであろうが、この結論は正しく、一刻も速やかに今日までの誤られた人生観を変えるべきである。

理解を正すために心霊書の味読を

たしかに、上の張については、あくまでも間違いないことを個々人が確認すべきであろう。そこでぜひ心霊科学に関する一通りの解明がものされている本を読んでもらいたい。ただし、現在日本で出版されている、いわゆる「心霊の本」では、必ずしも正しいことが述べられているわけではない。ぜひ、海外、ことにイギリスで出版されている本

を中心に探してもらいたい。なお、この種の本について一言しておきたいことは、本会（「心霊科学研究会」）の創立者・浅野和三郎先生は日本にこの心霊科学を紹介・普及させようと、当時において多くの学者、文化人を集めて発起人会を開き、ついに創立に至ったのである。そうした経緯から理解できるように、本会刊行の本、ことに翻訳本は正統なものである。そこでせめて浅野先生の著書「心霊講座」一冊だけでも、ぜひ味読していただきたい。そして、この二つの結論の間違いのないことを信じるところまで勉強してもらいたい。

死後の世界は単一、独立した世界ではない

上述のように、人間は、死後にも個性は存続していること、そして幽明との交通は開かれ、死後の世界との通信は可能であり、幽明間は叩けば響く連動装置となっている。

これと関連して、一般に一つ誤解があるのではと思っている。

それは、この「死後の世界」という世界が単独の世界で、独立している世界ではなからうか、という点である

これについて、心霊研究では、世上で死後に「世界」があるとか、「その世界」とはいうものの、現界（地上世界）の連続であることを指摘し、この事実を科学的、実験的に立証しているのである。

この「死後の世界」の存在については、おそらく、わが国の人々の多数は反対することであろう。学者を含めてそれを認めない人々は、その理由として、ヤレ心霊科学の、ヤレ心霊研究の、とはいうが、とんだデタラメ、へボ理屈で、いかにも学問らしく主張して、科学的研究とはチャンチャラおかしい、ということであろう。

ここに、この死後の世界を認めている少数派もいる。それは宗教の世界の人たちである。しかし、彼らは認めるといっても心霊研究にもとづいて認めている内容とは根本的には違っている。それでも、そういった世界が死後にあるという。例えば地獄、極楽、浄土、天国、煉国等々、という世界がそれである。

心霊研究者の立場から捉えようとしているのは、少数派の人たちの意味する特殊な立場で、信仰しているからとか、信者だからと言うような区別をしてのことではなく、「人間すべてが」、「人類全体が」と言っていることである。これは人類としての大問題と言えることである。心霊研究は学問であり、人間学ともいえる。そこで「人間」といっているのは、人間のすべて……人類全体が対象であるということである。

心霊研究に基づいて「人間」を見直す

人間学として「人間」を見直すことは大切であり、その解決は心霊研究によってこそなされるべきである。そこで人間について、もっと具体的に考えてみようということになる。おそらく一般の人々は、「人間は肉体で生きている」と考えているはずである。

ところが、心霊研究によると、実は、「その生きているという肉体は物質で、死物である。生命そのものではない。その生命のない肉体に生命を与えているのが霊魂である。それで生きものとなって生活し、人生を送っている」ということが分かる。

要するに見方の違いとか、人間の組織の問題である。それだけに、それぞれその根拠を正してみる必要がある。

人間は肉体で生きているというのがわれわれ一般の学問的常識である。日本の学問では前述のとおり、肉体、すなわち人間となっているので、これではわれわれが意図とすることを理解することはできない。そこで、“人間は霊魂で生きている”、“人間は霊魂そのものである”という心霊研究の根拠を、もっと判りやすく理解させる必要がある。

これには、海外、ことに欧米の学問による発表に拠らざるをえない。それらは1848年前後から現在に至る研究の蓄積であり、これまでにそれらの発表は、実験・記録も個々に、あるいは、総合されたものなど広い分野にわたり無数の著書があるからである。したがって、そのアウトラインだけであっても、とてもここで叙述することは不可能なほどである。

この根本になるのは霊魂の存在の有無である。そして、これに限って言えば、その立証には、霊魂の働きによったものを「心霊現象」というが、その現象で、①霊魂の存在していること、また、霊魂が働いていること。またここで問題にしている②「死後の世界」の存在の立証をしようとするものである。

ここでは、この心霊現象の解明を行えばよい。この「心霊現象」には大別して物質（物理）的方面と精神（心）的の二方面によって現れ、いずれもその立証には「霊媒」という特殊な鋭敏な能力を持っている人間を道具として多くの現象を起こさせ、その解明を図ろうということである。しかし、この方法が一般人には納得が行かぬことが多いという。もっともひどいのは、ヤレ手品だ、詐術だ、やヤレ潜在意識の働きだと、われわれから言えば、ケチをつけられたことになる。なぜなら、そんなインチキ現象（詐術）があるとしても、それらを除いたものには正しい現象であるからである。

しかし、今日では、この霊媒による場合でも、種々の詐術を排除した方法を取り入れ、進歩した物質科学（自然科学）と同様の試験方法、追試方法をとっているのである。たとえば、暗闇での実験では、赤外線写真を撮るなどで詐術を防ぎ厳密を期しているわけである。

他方、そうした誤解や面倒を避けるために、霊媒による心霊現象を対象とせず、すなわち、まったく霊媒との関係はなく、自然におきた心霊現象……偶発現象といえるもの研究がある。この対象は大宇宙間にまた、人間と人間との間に起きている現象であり、実は、われわれの周囲に無数に生起しているのである。

この偶発現象だけでも霊魂の存在の事実は判然とする。たとえば、この偶発現象だけを対象に研究の歩を進めた学者、その代表として日本でもよく知られた世界的天文学者フラマリオンがいる。

彼、カミュ・フラマリオン（1842～1924）はフランス人で、1882年にフラマリオン科学研究所を創立し、さらに当時世界中に10万の会員をもつフランス天文学会を創設し、一生涯天文学の一般大衆への普及を図って世界に奉仕したが、一方で地位や名誉を一切顧みない、まことに高潔そのものの学者であった。

中年に及んで、心霊科学の存在を知るや、この学問によって世の神秘の扉が開かれることを確信するに至った。当時一般の心霊科学者が霊媒による実験に重きをおいていたのに対し、彼は日常生活から、また宇宙間での不思議といわれ、あるいは怪奇という、当時の科学で解明ができなかった現象……これら偶発現象の実例を多数集め、冷静に観察し、そこから正確な結論へ導く研究方法を採用した。そして、この研究の結果、霊魂の存在と、人間は霊魂によって生命が与えられ、人生を送っていることの実事を科学的に立証したのである。

現在、霊魂を認めず、人間は霊魂で生きていることに疑いをもつ日本人にとっては、このフラマリオンの研究結果によって理解してもらうことが唯一の方策かもしれない。

本会（心霊科学研究会：日本スピリチュアリスト協会の基幹組織）の会員桑原啓善氏の研究報告の一節を紹介したい。

『彼（以下、フラマリオン氏を指す）の著書を読むならば誰しも、彼の結論が、どうしても疑えない真実である、ということをお認めざるを得ないであろう。こうして、彼は霊魂の実在を証明し、心霊研究に、力強い新しい光を加えた。

私思うに、もし、われわれがわざと、霊魂の存在を疑おうとしたり、また、もはや疑う余地がないのに、わざわざ理屈をひねり出そうとする誤った感情をもっていないのであれば、フラマリオンの著書を読むだけで、十分に、霊魂は在るということを教えられよう。しかも、それは科学的に、厳密に、誠実に実証されている事実であると告白せざるを得ないだろう。

私は、フラマリオンの三つの重要な著書を研究したいと思ったが、残念ながら、「未知の世界へ」と、「死とその神秘」の二冊だけしか手に入れることができなかった。したが

って、フラマリオンの研究としては不十分であるが、その完成は将来にゆずるとして、ここでは二冊の著書をもととして述べることにする。

私は、この研究にあたって、つぎの方法をとった。フラマリオンの結論の是非をより冷静かつ公平に批判するために、まず、彼が二著の中で資料として取り扱っている、数百の偶発的心霊現象の資料を、私自身の方法で取り扱って判断し、確実にそれと比較してみる。その後、彼の結論をみて、フラマリオンのものであるが、その分析や判断は、私自身のもの、そして、その間に、フラマリオンの見解を挿入して進めて行こうと思う。

かくして、結論として言うなら、フラマリオンも、私も、この資料からともに、「霊魂は肉体から別に実在する」という点において、全く一致するのである。(原文のまま)』

(注) フラマリオンの厚かった偶発的心霊現象の資料分類。

『未知の世界へ』の所載

① 瀕死者の顕示を、覚醒状態でみた	186 例
② 瀕死者の顕示を、夢でみた	70 例
③ 生者間の通信	57 例
④ 夢で遠隔を透視	49 例
⑤ 夢で未来を透視	74 例
計	436 例

『死とその神秘』の所載

⑥ 以心伝心 (テレパシーによる通信)	10 例
⑦ 遠感 (意志なくして行われる通信)	25 例
⑧ 透視	23 例
⑨ 未来の予知・予測	32 例
計	90 例
総計	526 例

以上、フラマリオンが両著書に発表した、霊魂の実在立証のために使用した実例は、9種類 526 例である。

人間は霊魂で生き通している……人間は霊魂

「死後の世界」は現世のつづきであるという。この前提には、まず人間は霊魂で生き

ているという。その靈魂の存在は確かな事実であるかを確立させるためには、心霊現象によって確認させることが本質的には妥当であるが、霊媒によらないものを選んで、偶発的心霊現象（霊媒とは関係ないと一般にいえる現象）の研究によって得た結論……「靈魂は肉体から別に実在する」という。

これについて、肉体とは別に、靈魂によって本人の自我、自己、個性なるもの、すべて、私なるものが成り立っているのであって、その私は肉体ではないことが、この結論で理解されたことと思う。

この靈魂は靈魂不滅という言葉にもあるように、不滅であり、永遠に亡びない超物質エーテル体によって構成組織されている。だからこそ不滅なのである。この靈魂というもので生まれて、この世の中に成育する。が、この地上が物質界であるので、胎内において、肉体という地上界での活動に必要な物質を外包として、生々、この世という第一圏で呱呱の声を上げるのである。ここにおいて靈魂で生きている。靈魂によって生命は与えられているのである。さらに靈魂の発達過程としての地上において靈魂の本質である向上性発揮の過程（修行）を経る。それが終わればつぎの第二圏・霊界へ向上の道へと歩を進める。（この第二圏とは言ったが、この霊界にも幽界、狭義の霊界、神界の三階層がある）

とにかく、人間は靈魂で生まれ、靈魂で永遠の生命をまっとうするまで向上に向上を重ね、遂には宇宙ともろとも生き通すのである。だが、個性は亡びることはない。心霊科学は、この靈魂不滅といえる用語を、「死後個性の存続」と言っていることを、この言葉によって理解を深めてほしい。

また、地上からつづく、つぎの第二圏霊界を「死後の世界」と分かりやすい言葉を用語に採用している。いうまでもなく、「死後」ではなく、靈魂の行方の一領域とでもいえる名称である

魂の行進曲

つぎは靈魂がたどる行程表。靈魂の歩み（道中記ともいえる）として、ここでマイヤース（「個人的存在の彼方」の一節）がつぎのような順序を述べている。

- ① 物質界（これが個人的存在の発端）
- ② 中間界（死と言われている直後におかれる休養地）
- ③ 夢幻界（幽界の入口）
- ④ 色彩界（幽界の第二段。意念がやや自由。振動のきわめて烈しい多彩多様の形型を

つくっている)

- ⑤ 火焰界 (幽界の第三段。そろそろ個人生活を離れ、共同の宇宙生活に入る。形、色、感情から離脱)
- ⑥ 光明界 (靈界。魂は無色。バランスのとれた純意念の境地)
- ⑦ 超越界 (神界。過去・現在・未来なく、一切の存在が意識、無上智の理想境。真の生命の実相) ……現在のところ、かつて地球上に生命を享けた人間で、この境に入る者はほとんど無い。

現界と死後の世界は一つか

ここで、もっとも重要なことを述べておく必要がある。それは、「靈界」をただ「死後の世界」と孤立的に、単純に考え、その世界の真相は“こうである”と判れば、それで“なるほど”と、今までの常識に、新たな心霊常識をも加えればよいということで止まってはならない。

何となれば、人間には靈の憑依ということがある。それは、第二圏の幽界に居住している靈魂は、とかく地上への執着が断ち切れない50～70年の地上生活であったとか、また、それ以外に、あまりにも短い一生であったという人間的感情から、つい地上を回想する感情が強くなる傾向がある。そうした時に、たまたま地上の人間から同じ想念がやってくる。すると、向上心のもち主の靈であっても、一応反対に向下する事態が生じることがある。これが地上の人間、その他の事物に憑依現象を生み、その靈を地縛靈とも言う。

幸・不幸、不運 (運命) の原点

地上のすべての禍い、不幸、不運のすべてはここから原因する。が、このことは、唯物的人間観、その上に立った人生観では理解することはできない。(したがって、今日の物質万能時代には、万人の想像もできない考え方である)

これには前述した心霊科学の第二の結論、幽明交通が可能であり、つねに靈界と地上とは交通していることがかわり合っている。

この理論は、原因と結果の関係を示した「因果律」によっても理解される地上の物質科学の法則である。その法則は、実は単に地上と地上の物質界のみではない。地上 (物質界) と靈界 (超物質界) との間にも行われているのである。これに考えが及んだだけでも、単に「死後の世界」が存在することだけではすまされない重大事であることが理解できよう。たとえば、地上の禍い、不幸の根本的原因がここにあるからである。

なお、すべての宗教の信仰者たちにとって、この点がもっとも重要なことで、拝み方に誤りがあるとき、知らず、憑依したいことにはそれ程心を向けていなかった霊も、意識的にではなく、気づかずに憑依現象が行われているということである。注意しなければならぬ点は拝み方の正否にある。

まとめ

最近の人々の考え方の傾向として、どうやら、「われわれの死後には別の世界があって、そこに生きているようだ」ということを、霊魂不滅思想をも含めて信じるようになってきた。

これは、人間が「生」から「死」までが一生であり、一生涯というのだという従来の考え方、これが変わってきたからであろう。しかし、この変化が正しいのである。

それを立証しているのが心霊科学である。しかし、何分、この学問は、日本で学問とされている学問（科学）の範疇には入れられていない。海外、ことに欧米では、1848年のフォックス家事件以来、進歩発展を重ね、科学的実験による研究は数えきれないほどである。それに伴って心霊研究に関する著作の出版部数は、世界的に最も多いといわれている工業関係のものよりもっと多くなっている、とフィンドレイ（英国の心霊研究家）は述べている。

何にしても、社会通念上、肉体は「死」を以て終わりとして表現されるが、その実、人間は「生き通し」の存在であり、人間の構成組織として、肉体の内部に包蔵されている幽体（超物質体）によって生き通すことができるように造物主（第一義の神）は手続きされているのである。

しかし、多くの人たちのなかには、そうした見方をせずに、単純に、「死後には、現世とは違った別の死後の世界というものがある」と考えている人たちもいる。あるいは、その死後の世界を、宗教的に、天国とか地獄、あるいは西方浄土、極楽と地獄という類の世界と信じ込んでいる。ところがこれも誤りなのである。とくに、この主張に拘る宗教信者（この類いの考えを常識にしている人たちや宗教者は案外多い）の考えを、心霊研究が明らかにした死後の世界と混同していただきたくはない。

すなわち、この身のまま（幽体とは言うが、肉体と同じ形である）の生き通しであり、しかも、地上で死ぬ瞬間に抱いていた心のまま、つぎの世界でも持ちつづけているわけである。言い換えれば、幽体の世界（霊魂の世界、霊魂界、広義の霊界と同義）で生き通し、永遠に亡びない生活をつづけている。その死後の世界は、心のみで生きている世界でもあり、その時の心持ち（心の進歩の程度）によって居住する世界が変わるのであ

る。これは霊の向上性と大いにかかわることである。

このように、死後の世界は心による階層の世界であり、そこに魂（霊魂）の進化過程が組み込まれている。霊魂の進歩の順序も正しい法則に基づいており、生きていることについては現世と同様であることは言うまでもない。

そこで人間の正しい生き方は、霊の向上過程を十分に理解することであり、この地上生活の時代から始める必要がある。すなわち、心霊科学にもとづいて真の人間を知ることがまず大切で、その人生観を以て毎日の生活の中で生かして行くことである。

そして真の幸せといえる永遠の幸せ（次の世代にわたる）を会得したいと思う人々は、人間は霊魂であること、その霊魂によって生命は与えられ、永遠に、この霊魂によって個性（自我、私）が存続し生き通す生き物であることを自覚することで守護霊の道（幸福への道）は拓かれるのである。

このような人生の歩み方を指導し、日本人向けに系統立ててその原理を説いているのが、「日本スピリチュアリズム（神霊主義）」である。